

書評

マイケル・サンデル著（鬼澤忍訳）

『実力も運のうち——能力主義は正義か？』

（早川書房、2021年）

田中 美里

1. 本書の意義と概要

本書は、共同体主義の立場から、様々な社会的・政治的問題について論じてきたマイケル・サンデルが、「能力主義」を検討したものである。能力主義は、個人はその才能や能力によって区別されて良いとする考え方で、サンデルによれば、能力主義は、長きにわたって「社会的絆と相互の敬意」を崩壊させてきた。そして、本書では、このような事態が生じた経緯の説明と、「共通善」への道を見出す方法が論じられている（16頁）。

まず、今日のアメリカ社会において、能力主義が深く浸透していること、そして、それが「ポピュリスト的ナショナリズム」を誘発してきたことが論じられる。ドナルド・トランプが大統領に当選した時、少なくない人々が、その原因を、人種差別的な外国人嫌悪の高まりや、あるいは、グローバル化や最先端の技術の発展についていくことができなかつた人々の「苦情」に求めた。しかし、サンデルは、この問題が社会的敬意にも関わっていることを指摘する（30頁）。

グローバル化の経済的恩恵は、不平等な形で分配された⁽¹⁾。政治家たちは、人種やジェンダーによる差別を取り除くことばかり重視し、この差別の是正さえされれば、その後に残る格差は自己責任として正当化できるものであると主張してきた。しかし、このような論理は、仕事や収入を上手く得られない人にとって、自分が置かれた状況は、自分の才能や意欲が欠けていたせいなのだと感じさせ、意欲消沈させる。

次に、能力主義という一種の倫理が、どのようにして、人間にとって馴染み深いものとなったかが論じられる。サンデルによれば、自分の成功や失敗が、自分の能力や功績を反映しているという考え方は、キリスト教的な道徳的直観に深く根づいている。すなわち、社会に存在する苦難や悪の原因を神や運命ではなく、人間の自由意志によ

て説明したのである。この考え方は、最終的にピューリタンの労働倫理と絡み合い、「自助と自分の運命への責任という、能力主義的な考え方に沿った倫理」を育むこととなった（61頁）⁽²⁾。

さらに、今日の資本主義社会では、このような能力主義的な考え方が、本人が得られる収入と結びつけられるようになる。大きな苦勞の末に大学受験を突破し、学士号を得て高い収入を得るようになった人々は、自らがそのような「出世」に「値する」ものと感じ、学士号を持たない人々を蔑視する。しかも、この蔑視は、性別や人種による差別の場合とは異なり、ごく正当なものと感じられている。

サンデルは、能力に応じた仕事の割り振りそのものには反対していない。そのような割り振りには、有効性や公正さがあり、そして、自分の運命は自分で制御できるという信念を与えることで、一定の自由概念の基礎にもなっている（50-51頁）。他方、その考え方が、とすれば、「自分の運命に全責任を負っている」と私たちに想定させることには問題があるとされ、とりわけ、今日の社会で、学歴偏重主義の側面を強めていることに、批判が向けられている⁽³⁾。

続けて、倫理的な観点から、能力主義への批判が展開される。ある人がそもそも何かの才能を持っているか否か、さらに、自分の才能が、自分がいま生きる社会で高く評価されるか否かは運の問題である。ここで、ある人の努力や勤勉さを強調しても、あまり大きな意味はない。社会における成功のためには、才能と努力の双方が必要なのであり、勤勉な努力だけで成功を勝ち取るのは非現実的だからである。しかも、努力するためには必要な意欲さえ、運によって割り振られる。

行き過ぎた能力主義に対抗するための既存の議論として、サンデルは、ハイエクとロールズの理論を検討する。これらは、結果としてどのような政策を支持するのかについての違いはあるものの、どちらも、私たちが市場から得られる収入は、私たちがそれに値することを意味しないことを主張し、それによって、能力主義に歯止めをかける側面がある。しかしながら、サンデルによれば、これらの議論は今日の状況、すなわち、非常に多

くの人が、経済的な報酬としての収入を、それに値するという道徳的な価値と結びつけていることを説明できない。これについてサンデルは、「お金がほぼあらゆるものの尺度となる市場社会」では、「功績と価値の区別は無視できるほど小さくなっている」ことを指摘する（200頁）。この点については、2で、検討を深めることとする。

最後に、現状を変えるための政策として、大きく分けて3つの方法が提案されている。

まずは、大学入試制度の変革である。サンデルは、現在の大学入試制度が、入学希望者の中の競争を高めることにのみ関心を向けていることを批判する。すなわち、ある大学に入学することを困難にすればするほど、その大学の学位を持つ者の特権は強化され、社会における学歴偏重主義は強まる。ここで提案されるのが、「くじ引き入試」である。これは、まず、ある大学に出席してくる者全体のうち、当該大学での勉強についていく素質を欠いている者や仲間の学生の教育に貢献できない者を除外し、後はくじ引きで最終的な合格者を選抜するという方法である。ここでは、第一段階で、学力による選抜を緩やかに行うことで、教室での議論や学習の質が大幅に変わらないようにしつつも、最終的な合否は運に委ねることによって、人生での成功が学位の有無で決定されてしまう現状を変えることが目指されている。

次に提案されるのが、現在十分な社会的承認を受けていない労働者たちが、難関大学の学位を持つエリートと対等の立場で民主的な議論に参加し、そしてその意見が適切に尊重されるようにするための諸政策である。具体的には、専門・職業教育、職業訓練といった、労働者たちに必要な技能や知識を提供する場所に対する公的な支援を手厚くすることなどが提案されている。ここでは、単にこのような場所の規模を拡大するというだけでなく、そこで行われる教育の内容についても、道徳理論や市民性を論じる講義を充実させるなど、労働者たちが民主的な議論に十分参加できる知識を身につけるための授業を充実させることが重視されている。その狙いは、エリートだけが冷静で理性的であって、それゆえに社会・政治的議論に参加し政策を決定する素養を持っているとい

う能力主義的な誤解を覆すことにある。

最後に提案されるのが、市場や経済のあり方についての「共通善」に関する正面からの議論を始めることである。私たちはこれまで、自らの消費者としての側面のみ着目し、できるだけ安く多くの商品を手に入れられること、経済成長を最大化することが良いと考える傾向があった。しかし、私たちは消費者であるだけでなく、生産者でもある。サンデルによれば、このことを十分に認識した市民は、消費者としての幸福だけを追求して、自分たちの消費活動を無批判に受け入れるようなことはしないはずで、むしろ、自分たちの嗜好そのものを見直し、改善する機会を持つことで、充実した人生とは何かについて考えるようになるはずである。そして、サンデルは、労働に対する社会的承認をめぐる「共通善」を語る場合は、その絶好の機会となるのだとする。

2. 社会との「絆」の重視

ここでのサンデルの議論の特徴は、様々な人に労働を通じた社会貢献の場そのものを与え、社会との「絆」——他の人々との間で対等な相互的依存関係を持ち、そのような依存関係に積極的な評価を与えること——を実感することの重要性を強調する点にある。上述の通り、サンデルは、市場社会を前提とする限り、そこから得られる収入と功績とを切り離して考えることは、理論上は可能でも、現実的には困難であることを指摘する。この点について、サンデル自身による議論は簡潔なものにとどまっているので、評者の手で敷衍する。

市場社会において、私たちは、その理由は何であれ、「欲しい」と思う物やサービスを購入し、少なくとも、どの労働に対して金を払うかという取捨選択をしている。この時、収入はその人の労働の需要を示すものであるように見え、これを裏返せば、私に収入が支払われることは、社会の一定の人々が、私の仕事を必要としてくれたことを感じさせることになる。とはいえ、私たちの消費行動は、必ずしも熟慮の上でされるものとは限らず、衝動的に購入して後から悔やむという経験をしたことがある人は多いはずである。問題は、現在私たちは、収入以外の方法で、自分の労働の社

会貢献の程度を知る方法を十分には持っていない、ということにあると思われる。

身分や人種、性別など、身体的特徴や生まれが、社会における役割をほとんど決めてしまっていた時代には、自分の労働がどれくらいの社会貢献をしているかについて自己認識をする際、収入が尺度になる程度は低かったのではないだろうか。サンデルも本書の中で度々指摘しているが、たとえば、封建社会で農奴の身分に生まれた場合、収入が低くても、自分は地主よりも社会貢献していないと考える人は少なかったはずである。今日の私たちは、自分で社会貢献の方法を探さねばならなくなっている。そして、互いの労働に対しての評価について、社会で予め共有された評価軸はないように見え、しかも、社会全体でそのことを改めて議論する場はほとんどなく、他人の労働に評価を与えるという機能を、自由市場に大きく委ねているといえる。こうした中で、収入が低いことは社会における貢献度の低さを感じさせることとなる。

このような考え方が成り立つのであれば、市場価値と社会への貢献度の実感を分けることは難しく、私たちは、十分な収入を得られる労働や活動に、自らの身を置き、そこで社会的な貢献を実感することそれ自体に誇りを感じるのであり、いくら、収入とは別に再分配がされるとしても、自由市場の中で自分が稼いだ金が少ないことは、屈辱的に感じられることとなる。

3. サンデルの提唱する政策の効果

サンデルが提案する「くじ引き入試」は、たしかに、学士号を持つことができるかどうか、あるいは、人生において成功をおさめることができるかどうかということが、運の問題であることを、分かりやすい形で顕在化させる効果を持ち、学位を持つ者のおごりを減少させる効果を持つだろう。また、労働者に対して、道徳理論や市民性について学ぶ機会を広く提供することで、労働者はエリートにくらべて、冷静で理性的な議論には不向きであるという誤解を解くことができれば、エリートだけの意見が優遇される今日の政治のあり方が変化するきっかけとなると思われる。

しかし、このような手立ては、社会で高く評価される能力の種類を増やすものではなく、能力主義そのものを克服するものではなく、サンデル自身が本書で指摘していた能力主義の問題点は、社会で評価される能力の種類がある程度増えようとも、やはり残存するように思われる。

サンデルは、現状の社会で、不当にも価値が低く思われている職業として、配管工や看護師などを挙げている。たしかに、これらの職業は私たちの生活に欠かせない職業であり、その社会的貢献は適切に評価されるべきである。しかし、配管工や看護師などのような、ある意味、目に見える社会貢献をしていない人は、依然、自らの労働や存在に対して、十分な承認が得られない可能性がある。たとえば、現在では偉大な芸術家として評価されている人の作品が、同時代の人々には全く評価されていなかったということは、よくある話である。このように、ある人の活動が、同時代の当該社会の人にはどうしても評価されないということは少なくない。

サンデルは、労働の成果に対する社会的評価や承認を、どのように割り振るべきかをめぐる「共通善」について、ともあれ正面からの話し合いを開始すべきであるということを主張しており、最終的な結論は市民間での議論に委ねている。とはいえ、ここで行われる議論がどのような方針で進むべきかについて、検討しておくべきである。

これについて、評者は、単に、社会的承認を得られる職業の種類を増やすだけではなく、そこにもどのような職業が含まれるかというリストに、十分な流動性を確保することが重要であると考えられる。ここで流動性というのは、世代をまたいで、貧困さや裕福さが引き継がれないようにすることではなく、もっと短期的に、一人の人生の中でも、その人の労働の成果が得られる社会的評価が変わりうる余地が十分にあるということである。この流動性がなぜ重要なのかについては、4において、詳述することとする。

4. 流動的な役割分担と平等

今日、多くの人が、性別など、生まれつきの身体的特徴によって人を区別することは許されない

差別であると考えている。つまり、本人が選択したわけではなく、生まれつきで割り振られる属性や特徴について、その人に責任を負わせることは不合理だと考えられている。そして、あることを成し遂げるための才能や意欲は、性別と全く同様に運によって割り振られる。それでは、才能や意欲による区別は、どのような形でも許されないのだろうか。

ここで、能力主義とは、広く、能力による区別、すなわち、ある人の得手不得手や、当該労働への意欲の有無を広く含んだ意味での、その人の能力を評価した上で、それに応じて職業や地位などの社会的な役割を割り振ることを意味することとする。このような発想の基礎には、役割分担の考え方があるように思われる。人間には得手不得手があり、また、どのような労働に意欲を持つかも異なるという認識を前提に、才能や意欲に応じて、社会全体で必要とされる役割を割り振ることで、互いの能力を補完しあって、自分一人で生きる場合よりも豊かな成果を得ようとする発想である。このような役割分担は、ある人の才能や意欲の観点から当人に向いている役割を社会が与えている限りでは、有効なものである。不得手なことや意欲のわからないものに労力や時間を割くことは当人に多大な苦痛を与えるだろうし、大きな成果も期待できない。また、役割を分担して果たすことで、自分が果たしている役割に専門的に労力を割くことが可能になり、高度な知識や技術を蓄えることが可能になる。

問題は、当人が望む役割と、社会がその人に求める役割に齟齬がある場合である。たとえば「女性は出産せよ」という言葉が、少なくない女性にとって差別的で屈辱的に響くのは、その女性たちが、自分の人生の意義を、子を産み育てるという労働以外に見出しているにも関わらず、そのことを無視して、一方的に役割を決めつけているからである。同じように、自分の望む労働がその中にはないにも関わらず、ある社会ですでに評価されている職業リストの中から無理矢理に役割を割り振られることがあれば、その人は、当該社会で自分は十分に尊重されていない、つまり、差別されていると感じるのではないだろうか。

この観点から、評者が重要だと考えるのが、先述した「流動性」の確保である。これは、人は、ある人が果たすべき役割を終局的に決定してしまうことはできないという理解に基づいている。このように考えるのは、役割分担の基礎にある「評価」という営みが、一定の危うさを持っているからである。

社会における役割を各人に分担するためには、まず、各人の能力を把握する必要があるが、そのために私たちが用いているのが、ある人の労働の成果を評価するという方法である。ここで、労働の成果とは、必ずしも、ある人が職業として行った労働に限定されるものではなく、たとえば、趣味で作ったものや子どもが作ったものなども広く含むこととする。

私たちは、日々、自分の労働の成果を自分のそれと分かる形で公表して、他の人からの評価を受ける（本稿を評者自身の名前で公表していることも、そうした営みの一つである）。あるいは逆に、公表された他の人の労働の成果を評価する。問題は、ある人の労働の成果への評価が、その人の能力を賞賛したり蔑んだりすることに繋がる傾向を持っていることである。このような評価のあり方は、能力が運によって割り振られるということを十分に理解したものであるとはいえない。これが、評価の「危うさ」である。

しかしながら、評価は、常にその危うさを露呈するとは限らない。すなわち、評価という営みは、それが未来志向の、コミュニケーション的なものとして行われる限り、能力は運によって割り振られるという認識と両立可能であると考えられる。

まず、私が自分の労働の成果を公表することは、いまの私の世界の捉え方を公表するという側面を持っている。すなわち、成果の公表を通して、私は、どのような労働に価値があると考えていて、その労働にどのように向き合うことが良いと考えているのかを公表している。ここで、ある人の労働の成果を一度低く評価したとしても、その人の能力そのものの否定に必ず繋がるわけではない。ある人の労働の成果へ向けられた批判が、その人の世界の捉え方の問題点を指摘することを通して、批判者自身の世界の捉え方を開示しようとす

るものである限り、批判された人は、批判に対してさらなる批判をすることができる。いま、私の労働の成果に表れている世界の捉え方に不十分なところがあると批判されたとしても、それに対して、私も自らの考えを述べる機会が十分に与えられるならば、私は、相手と共に、自分の能力や役割についての検討を続けていくことが出来る。つまり、評価というものを、評価する人からされる人に一方的に下すものとしてではなく、相互的批判のきっかけとして理解することも可能なのではないだろうか。

私たちは、人間である限り、自分自身の経験や知見、想像力に限界を持っており、ある人がすぐに行った仕事の成果だけを見て、その人が持つ可能性すべてを見通すことはできない。ある人の能力が、他の人も、当人さえも思ってもみなかった形で発揮されて世界をより良いものにするという可能性はいつでも残っている。「評価」が正当な営みとなるのは、それが、ある人の能力そのものに対する終局的な「裁き」となってはならず、評価された人とした人との間での、未来における対話の余地を残している限りにおいてである。

この観点からは、ある人の労働の成果に対する評価を前提にして、役割を分担するという発想そのものは、有用なものであるが、しかし、ある時点でなされた評価が、絶対的・終局的なものとなるならば問題がある。したがって、社会における役割分担は、それが十分な流動性を持っており、本人が望めば、その役割から降りて、他の役割に移ることも適切に検討される余地が残されているものでなくてはならない。

なお、このような流動性は、私たちが相互的な依存関係を築くことができる相手、すなわち、社会の中で何らかの役割を果たそうとしている人との間で確保されるべきものである。もちろん、現状の特定の社会に対して何らの関心も持たず、それゆえに当該社会での役割分担に関心を持っていない人がいても、それ自体でその人との相互的依存関係が否定されることはない。ある人が、なぜ、いまの社会のあり方に不満があり、関心が持てないかを主張することは、そのような問題提起それ自体が多大な社会的貢献であるし、既存の職業リスト

の中から役割を選ばねばならないわけではなく、その人がどのような役割を果たすのが良いのかは検討に値するのであるから、この相互的依存関係の条件は、相当に緩やかに捉えられるべきものである。他方で、他人の利益に関心を持つ能力が全くないがゆえに、そもそも役割を分担することそのものに全く関心が持つことができない人との間では、流動性の確保は困難である。しかしながら、この区別は、社会が相互的な依存関係を前提にするものであることを認めるならば、正当化されるように思われる。

5. おわりに

本稿での議論は、検討が不十分な点をいくつも残している。たとえば、以下のような諸論点である。労働を通して社会貢献を実感し、社会と絆を結ぶことは、私たちの人生にとって本当に重要なのか。社会は、役割分担という意味での相互的依存関係で捉えられるべきものか。私たちは、社会において何らかの役割を果たさねばならないのか。どのような場合、役割を果たしたという風に認められるのか。流動性の確保は、実際どのように可能か、などである。これらについては、稿を改めて検討することとしたい。

- (1) サンデルによれば、「最も裕福な1%のアメリカ人の収入の合計は、下位半分のアメリカ人の収入をすべて合わせたものよりも多い」(36頁)。
- (2) なお、サンデルはここで、能力主義的な考え方がキリスト教的な直観に基礎を持つとしているが、このような人間の自由意志に基づく考え方は、少なくとも今日の日本でも深く根づいているように思われるし、おそらく、キリスト教において人間の自由意志を強調する論理が深く根づいたのも、広く、人間にとって、運命に自分で責任を持つこと、自力で運命を制御しようとするのが魅力的な考え方だからなのだろう。
- (3) 本書の原題も、The Tyranny of Meritであって、能力や功績という指標によって高く評価された人々による専制的な支配が行われていることが批判の対象となっている。